

夜中に目が覚め、トイレで用を足し、電気毛布がセットされた布団にもどった。三時三十五分。もう少し寝ていよう。しばらくすると、隣で寝ていた妻が「いまの、なに?」「え!?!」「ピー、ピー、ピー、ピー、って」「聴こえないよ」「いや。聴こえた」「空耳じゃないの?」「いや。ぜったい聴こえた」。

妻は、布団から抜けだし、綿入れを着込んで居間の方へ向かう。私は目を開けたまま、布団の中でじつとしていた。妻が戻ってきて、「ストーブのスイッチは切ってあったし、台所も異常なかった」「そうか」。

安心した妻は、布団にもぐり、また眠るようであった。体内時計が起床時刻を知らせたので、私は静かに起き出した。ダウンジャケットと綿入れを着込み、居間に行き、ガストーブのスイッチを入れる。柱時計は、四時二十五分。持参した文庫本を手に取り、ストーブの火の隣で、文を追いかける。火の音とペー지를繰る音だけが部屋を照らす。

奥の部屋で、がさごそ音がする。もうそんな時刻か。と。畳を踏む音が近づいてきて「おはよう」「おはよう」「新聞、取ってくるがらな」。母の朝が始まる。腰を曲げながら戻ってきた母が、「ゆぎ、そんだに降ってなくて、えがた」。母は、新聞をソファの下に置き、台所へ向かう。間もなく妻が起きてきて台所へ行き、「おはよう」「おはよう。まだ寝でれば、えがたのに」と母。

六時ちようどになり、どすどすと音がして「おはよう」。父だ。六時半。町の有線放送が流れる。それから四人そろっての朝ごはん。食事を終え片付けが済んだら、今度は菓<>くすり>>。「父さん、菓<>くすり>>飲んだが?」。母の声は甲高い。「はいよ。いま、飲むぞいだ」。一言一言が、ありがたく、なつかしく、心地よい。

居間のストーブに四人が集まる。父が、やおら新聞を広げ、顔を近づけて読みだした。その姿を見ていて、閃《ひらめ》いた。「新聞、だれ、持ってくるの?」「わがらにやでや」「あんで、くばて来るたが?」「なもや。クルマで来るたでや。軽トラだびよん」

私の実家は、バス通りから少し引っ込み、ゆるい下り坂になっている。新聞配達の軽トラックは、発進のことを考え、おそらく、ギアをバックの状態にして玄関先へ入ってくるのだろう。ピー、ピー、ピー、ピー、は、その音だったに違いない。一日が始まる。一年が始まる。



一年の始まりはいつも、思わず知らず、過ぎ去った懐《なつ》かしい時間へと誘《いざな》ってくれる。

小学、中学、高校と、私は学校へ弁当を持参した。給食は、経験していない。弁当は、家族が読み終えた数日前の新聞紙で包《くる》まれていた。ときどきこぼれた醤油のシミが付いていた。おしゃれなトートバックなど、まだなかった時代のこと。教室のあちらこちらで、大判のハンカチか風呂敷をほどき、がさがさ新聞紙を広げる音がする。いたって控えめだ。弁当を食べるときに困るのは、目のやり場。どこに目を向けて食べたらいいいのかがわからない。食べながら級友とおしゃべりするのは、はばかられ、それぞれ黙々と弁当に向かう。外の景色を愛《め》でる器量など、持ち合わせていない。そんなとき、目の前の新聞は、まさに救いの紙、神だった。弁当を食べ終わるまでの時間、私はひたすら新聞に目を落とした。小学生の私には理解できない記事が多かったけれど、そんなことは問題にならない。中学、高校と進むほどに、理解できる度合いが増した。

そうそう、あれは小学時代、ふと見れば、サバの塩焼きがどかんと入っている弁当の多かったY君も、私と同様に、新聞を読みふけていた。ちなみに私

の弁当のおかずは、イカを輪切りにし、醤油で煮つけたものが圧倒的に多かった気がする。

思い出の時間はさらに遡《さかのぼ》る。拙著『父のふるさと 秋田往来』の原稿を準備していた頃、父がこんなことを口にした。「おら、いつかいだけ、さががげさ、載ったごどあるよ」「ん!」「うそでにゃや」

父の話を要約するところだ。尋常小学校の二年か三年のとき、作文に、父の父、私の祖父がニワトリをさばいたときの場面をつづった。祖父が庭先でニワトリの首をひねり、毛を筆《むし》るのを、幼い父は、すぐそばから、目を皿のようにして見ていた。と、死んだとばかり思っていたニワトリが、半分毛を筆《むし》られた状態で、いきなり走って逃げだしたというのだ。父はその驚きを、驚きのままに記述したらしい。それを讀んだ担任の齋藤先生（井川町の現町長・齋藤多聞氏のご祖母）は、それを秋田魁新報社に送ってくださいました。しばらくして、それが新聞に掲載された云々《うんぬん》。

八〇年以上前の記憶のこととて、どれだけ信憑性があるかわからない。当時、三浦家では新聞をとっていなかった。だから切り抜きなど存在しない。「担任の先生に見せてもらわなかったの？」と尋ねると、「見せてもらたがもわがらにやども、わすいだでは」と父。この話を半分、いや、七割ほど私は信じている。秋田魁新報社の社長を務めた武埴三山は、大のニワトリ好きだ。三山の著書『離村記』には、「にわとりの夫婦」という、三山の感性が迸《ほとばし》り、リズムの極北とも感じられるエッセイが収められている。三山は昭和14年、編集局長に就いている。わたしの父は昭和6年生まれ。私の想像の翼《つばさ》は羽ばたく。編集局長の任にある三山が、父のニワトリ話を讀んだ可能性はなにか。同郷井川の子どもが書いた作文を一読し、幼い頃の父のリアリズムを、面白く感じたのではないか。地元秋田の新聞に、一度だけ自分の文章が載ったこと、それが父の記憶のなかでは、生涯忘れることのできない、お宝エピソード

ドなのだ。



つらつら、過去の思い出に浸《ひた》っていると、そばで母のつぶやくような声がする。にわかには令和四年のきょうに引き戻される。五木ひろし、八代亜紀、ジュディ・オング、海援隊、……。静かに歌手の名を読み上げてゆく。父も母も、うだつこ《四文字に傍点》が大好きだ。新春の特別番組があるらしい。

川中美幸、香西かおり、伍代夏子、松原のぶえ、美川憲一、……。『三山ひろしは、出にやみだいな』。母は、三山ひろしのファンなのだ。母のつぶやきを聴いているうちに、仏壇の前で祈っている母の姿を思い出した。亡くなった祖父の写真の前に鎮座し、前日の健康と無事を感謝し、新しい日の多幸の願いを口にしていた。守てけれやあ《六文字に傍点》。それは直《じか》の呼びかけに等しいものだった。名を、文を声にするとき、呼びかけられた者、事は、たしかな表情を伴って母の前に現れてくる。

いろいろな方面において分断が加速するいまの社会、時代の諸相の下《もと》、新聞は地域をつなぎ、記憶を呼び覚まし、家族をつなぐ。私にとって、新聞のある暮らしが、ふるさとの風景でもある。

新型コロナが、いまだ収束をみないけれど、秋田での二年ぶりの正月は、新しい年を迎えて、何が大切かを改めて確認する時間になった。